

いつからか百番目の猿

せんだいメディアテーク 八巻 寿文

いつからか、手元には失くしてしまったけれど「ひゃくばんめのサル」という絵本を、今でも大事に思っています。

土のついた芋は食べにくいと、最初のサルが川で洗って食べた。すると二番目のサルがまねをして洗って食べた。そして三番目のサルも。やがて百番目のサルが洗って食べたとき、遠く離れた所のサルが川の水で芋を洗って食べ始めた。というお話です。科学では証明できないけれど、否定もできないこのお話に、個人的かつ密かに確信を抱いています。

例えば、頭の中に外から何か一滴入り込んだ感覚でコトバが浮かぶことがあります。そうすると、それを書き留めなくてはなりません。その辺にある紙とペンをまさぐり寄せ、忘れる前に書くのですが、書き終えて寝ようとするときがやってくるのです。もう眠いの、疲れているのに、お構いなしにやってきます。それを、来なくなるまで書き留めなくてはなりません。

厄介なのは、書き留めたものを翌朝、読み返してもほとんどなんの意味が分かりません。まとまったところに書くわけではないので、部屋のどこかに失くしてしまいます。やらなければいけないことですが、でもやらなければ、この一滴はもう二度とやってこないと思えるのです。根拠のない使命感のような行為は、どこか遠くの行ったことも会ったこともない人から届いたものだから、なのかもしれません。

また、新しく何かを思いついたときに、普段は手に取らないクロッキーブックなんかを偶然に開いてみると、何年も前にすでにそのことが書き留めてあり、会えない遠い自分から今の自分にメッセージが届いたようで、驚いたりします。

似た感じで絵を描く場合があります。準備して待つ場合もありますが、やってくると40分前後、全集中します。その間はおなかもすかないし、寒くもないし、トイレに行こうとして途中で引き返し描き続けることもあります。描き終える

とおなかグウとなり、大きなくしゃみをして、トイレに駆け込みます。

こうしたことは、いつも一人の時ですが、たまたま誰かがいたときに「子供みたい」と言われたことがあります。その時「僕は子供をやめて大人になった覚えはない。」と、反論を心でつぶやいていました。

子どもは恒常的に、当たり前に関信していると思います。子供をやめて大人になるとは、どれくらいの常識なのか知りませんが、もったいないから意識してでも子どもをやめる必要はないと思うし、たまにしかやってこない何か一滴というのは、恒常的でないという意味で、大人だからといえるかもしれません。

効用としても、免疫力が高まる気がします。専門家ではないので断言はできませんが、何しろ一瞬であっても、飢えにも寒さにも耐えられる自然体なのだし。

ともかく「夢中な状態」は、尽くさないで次の「夢中」はやって来ないかもしれません。この通信は「デジタル」や「道具」ではなく、自然や人間の存在の不思議であり、目に見える、計測できるものは、人間が知り得るほんの一部のことではないのかもしれませんが。

そんなことを考えていたら、自分で移動もできず、煙のように漂うほど微小で、単純ながら遺伝子を持つウィルスは、生物の定義に当てはまるのではなく、ウィルスの存在に生物の定義をあてはめざるを得ないのではないか、という気すらしてきます。変異株の感染ルートが不明と言われますが、ウィルスの百番目のサルが離れたところで変異したのかもしれませんがね。

